基本にせまる問題となるが、さしあたり、鑑定の必要から生れたこれらの書物によって研究を進めなければなるまい。

上述の書誌的必要もあって豪華本となった本書は、史料公刊の上では、うらやましいばかりの理想的完璧なものとなっているが、本書によって、日本刀史の研究は大きく前進するものと思われる。

（B5判七六一頁〔半分は写真〕昭和四四年二月吉川弘文館刊・定価一二、〇〇〇円〔限定版〕）

（熱田　公）

京都市編　京都の歴史

本書は、通例の場合なら「京都市史」として出される性格の本であるが、あえて「京都の歴史」という一般書の体裁で刊行されたところに大きな特色がある。「官」の仕事でなく、「民」の、いうなれば京の町衆の自らつくりあげた歴史として世に問おうという意気込みがあるように思われる。

第三巻『近世の胎動』は、義満の太政大臣襲位信長入京までの室町・戦国時代を扱っているが、この時代を代表させるテーマとして「近世の胎動」をあげたことも特徴的である。常識的な理解からすれば、このテーマはむしろ安土桃山時代を扱う第四巻にふさわしいようであるが、序説で「近世の表徴」としてあげる「世界のなかの京都としての国際的環境の成立」・「銭貨が経済の主役となったこと」・「商人・職人などの新興階級」の形成と京都への結集、以上の三要素が室町時代に認められる、というのが本巻を通ずる主張である。第一章は「京都の再生」で、その第一節「世界のなかの京都」ではローマ・長安と対比し、同じく古代都市として出発しながら京都だけはなぜ近世都市にむかって再生しえたのか、という問を出し、全国の商品流通網の特質にその理由を求めている。序説を受け、巻全体の導入部をなす部分として、実に巧みな構成になっている。また本巻が第一回配本になったのも単なる偶然ではないことがわかる。

本巻は「京都の再生」につづいて、「宗教と商業の都市」「大乱と荒廃」「北山と東山の文化」「乱後の復興と町衆」「洛中・洛外」の計六章からなっている。この六章が、嘉吉の乱・細川政元のクーデターを目安に区分される三期に二章ずつ配分され、夫々政治・経済・文化の詳細な叙述が与えられている。なかでも、幕府の京都支配機構・土倉の実態・徳政一揆といった、最近学界でも制度史的な掘り下げの進んだ部分はその成果をふまえた密度の高い叙述となっている。

第四巻『桃山の開花』は、大阪夏の陣までの、安土桃山時代を扱っており、信長・秀吉・家康の三人の在世に合わせた三期に分かれ、前巻同様各二章づつ計六章の構成である。第一章「京都と天下一統」以下、「仏教とキリシタン」「京都の改造」「商業と貿易」「京都と徳川政権」「桃山文化の興隆」であるが、第一章の第一節「自由都市」は、西洋の自由都市、中国の都市と比較して京都の都市としての特異性をおさえた上で信長入京以後の叙述に入っている。前巻でみた「近世の表徴」三点がいずれも発展しながら三人の統一者によって大きく変容させられていく、というのがこの巻のモチーフである。

索引・図版一覧があって便利であり、三巻には酒屋・土倉等三〇種の事項を記した地図、第四巻には上京・下京の町組や祇園会の鉾の所在を示した大縮尺（一万五千分一）の地図が、別刷として入っており、巻

末にその解説があってまことにゆきとどいている。

（第三巻　菊判本文六七五頁・索引年表等三一頁昭和四三年一〇月刊・第四巻菊判本文七四一頁・索引年表等三一頁昭和四四年一〇月刊何れも学芸書林発売　定価各二、八〇〇円）

（村田修三）

F・レーリヒ著
瀬原義生訳

中世の世界経済

中世の商品流通が、当時としては可能なかぎりの広い「世界」を一つの経済体制に組み入れ、そこでは高級な贅沢品だけでなく、大衆的な一般消費物資も大量かつ広範に取引され、とうぜん商人層こそこの「世界経済」の主導者であったとして、ビュッヒャーの「都市経済」概念を完膚なきまでに批判したのが、レーリヒのこの名著であることは、こと新しくことわるまでもないであろう。昨今の歴史書翻訳ブームのなかとはいえ、いまさらビュッヒャー批判でもあるまいと考えるむきもあるかも知れない。しかし中世経済について流通部門への関心が相対的に稀薄で、しかも理論の硬直化、あるいは硬直した理論の横行を許しやすい体質をもつわが学界では、やはり歓迎されるべき訳業の一つといってよい。

本書の内容に対してもさまざまな批判がありうる。訳者も解説（一二二頁）で若干の論点を指摘しているが、そのほかにも、たとえば、毛織物その他の商品について中世遠距離商業の対象になったのが贅沢品だけでないことを強調しながら、第四章「需要充足にあたっての消費者の態度」では、「リューベックのある都市貴族」や皇帝フリードリヒ二世や「ウープランド地方のある立派な指導的人物」といった上層階級の贅沢品への強い欲求の実例を詳述し、しかもそのうえで「あらゆる世界からくる品物に対する」「一般消費大衆の衝動」を説明する、そういう論証の進め方には疑念が残らざるをえない。たとえそれが、史料的にないものねだりであるにしても。

原著は講演を印刷に付したもので、語学力に自信のない私などには読みやすいものではない。「逐語訳にとらわれず、原文の意味するところを正しく伝える」と意図された訳文は、おおむね平明である。訳者の労に敬意を表したい。ただしHinterindienを「インド奥地」（二六頁）と訳すのは乱暴だし、Kaufmannschaftは「商人団体」ではなく、やはり「商業」ないし「商人活動」とでも訳すのが妥当ではなかろうか。またブレーメンのアダムという男の「怪しからぬ言葉」（六五―六六頁）はむしろ「警世の句」であり、絹織物工業をフランスに移植しようとの試みは、「すべてのひとから期待されていた」（七九頁）のではなくて、「予期以上にうまくいった」のではないか。一四七八年、大ラーフェンスブルク商会がリヨンで大量のバルヘントを仕入れたのは、当時ドイツ自体でスペイン向けのバルヘントが十分に入手できなかったからであって、「ドイツだけで満足せず、スペインの国中をバルヘントで充満させた……」（四二頁）というのは適訳とは思えない。ことに、「消費者側のせまい範囲……」（三一頁）とか、「飲み食いについては、法外なものに対する欲求はおさえられていた」（三二頁）とか、「ロマンチックな精神とはおよそかけはなれた経済理論」（八七頁）とかの箇所は、私の理解とはおよそ正反対の意味になっている。なお、二四頁のリューベック市場での毛織物取引のくだりも、訳文とはち